令和4年度　学校経営計画に対する自己評価計画書（最終報告）　　石川県立門前高等学校

重点目標１　　県や市、地区の事業を活用した探究活動や課外活動を軸として学校全体の活性化を図り、魅力ある学校づくりをを推進する。

個別目標	具体的取組	主担当	現　　状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準		判定	分析（成果と課題）及び今後の取組策	備考
・探究活動の充実	・教員による「学校評価アンケート」の結果に基づく探究活動の指導力の改善	教務課	・地域の輪島市，門前町商店街，関係機関等と連携して，地域活性化に繋がる取組や物品等を具体的に創出する探究活動を行うことで，地域貢献の在り方を身につける必要がある。	【成果指標】（教員） 「地域貢献の在り方を指導するために門前地域の伝統・文化，自然環境，社会環境等を考える場面を創出している」	「門前地域を考える場面を創出している」と評価した教員の割合（①＋②）が A　８０％以上 B　７０％以上 C　７０％未満	①　行っている　39% ②　概ね行っている　39% ③　余り行っていない　22% ④　全く行っていない　0% ①＋② 78%	B	【分析】 フィールドワーク等、体験的な活動を行ったことで、地域活性化について、具体的なイメージを持つことができた。 【今後の取組】 フィールドワーク等を円滑に進めるために、地域の方々と連携を密にする。また、地域の方々からの要望も取り入れ、学校と地域が一体となった取組へと高めていく。	教員対象調査 （7，1月）
	・生徒による「授業評価アンケート」の結果に基づく探究活動の実践力の改善			【成果指標】（生徒） 「地域活性化の在り方を身につける方法を学ぶことができた」	「地域活性化の在り方を身につける方法を学ぶことができた」と評価した生徒の割合（①＋②）が A　８０％以上 B　７０％以上 C　７０％未満	①　できた　39% ②　概ねできた　46% ③　余りできなかった　15% ④　全くできなかった　0% ①＋② 85%	A	【分析】 生徒が発案したアイデアを具現化し、その評価を直に感じ取る機会があったため、取組の成果と課題を直接的に学ぶことができた。 【今後の取組】 探究型学習の進め方やその成果と課題を2年生から1年生に向けて発表することで、地域活性化の在り方を身につける方法を引き継ぐ。	生徒対象調査 （7，1月）
・魅力ある学校づくりの推進	・教員による「学校評価アンケート」の結果に基づく魅力ある学校づくりの改善	教務課	・小規模校であるためのきめ細やかな指導，保護者・地域の関係者の教育活動に対する熱心な支援等を活かし，保護者・地域の関係者の協力のもと，主に地域貢献の学びを通して，地域活性化に必要な創造力・企画力・情報発信力を育成する必要がある。	【成果指標】（教員） 「教科や総合的な探究の時間・部活動等の専門性を活かし，地域活性化に必要な創造力・企画力・情報発信力を高める指導をしている」	「教科や「総合的な探究の時間」、部活動等の専門性を活かし，地域活性化に必要な創造力・企画力・情報発信力を高める指導をしている」と評価した教員の割合（①＋②）が A　８０％以上 B　７０％以上 C　７０％未満	①　指導している　32% ②　概ね指導している　58% ③　余り指導していない　11% ④　全く指導していない　0% ①＋② 90%	A	【分析】 教員と生徒が一体となって活動することによって、生徒目線で思考し、生徒に適切な助言やアドバイスができた。 【今後の取組】 探究型学習によって引き出すことができた創造力、企画力、情報発信力を教科や部活動の指導にも積極的に取り入れていく。	教員対象調査 （7，1月）
	・生徒・保護者・地域の関係者による「アンケート」の結果に基づく魅力ある学校づくりの改善			【成果指標】（生徒・保護者・地域の関係者） 「地域活性化に必要な創造力・企画力・情報発信力が身につく教育活動が実施されている」	「地域活性化に必要な創造力・企画力・情報発信力が身につく教育活動が実施されている」と評価した生徒・保護者・地域の関係者の割合（①＋②）が A　８０％以上 B　７０％以上 C　７０％未満	①　実施されている　46% ②　概ね実施されている　52% ③　余り実施されていない　2% ④　全く実施されていない　0% ①＋② 98%	A	【分析】 評価は高いがインプットで止まっており、アウトプットには課題がある。 【今後の取組】 学校だよりや、HPはもとより、主体的に考えさせ、生徒の発信力を高める指導を継続する。	生徒・保護者・地域の関係者対象調査 （7，1月）
・ボランティア活動による地域・他者貢献意識の高揚	・総持寺参道清掃 ・海岸清掃 ・暑中見舞い、年賀状作成，等	生徒会 総務課	・学校・部活動単位での奉仕活動に年数回以上参加している。この奉仕活動を通して，何らかの助けを求めている人や地域のために，自主的な意志でボランティア活動に取り組む精神を涵養する。	【成果指標】（生徒） 「自主的な意志でボランティア活動に取り組むことで，自分が成長した」	「自主的な意志でボランティア活動に取り組むことで，自分が成長した」と感じた生徒の割合（①＋②）が A　８５％以上 B　７５％以上 C　６５％以上 D　６５％未満	①　できた　54% ②　だいたいできた　43% ③　余りできていない　3% ④　全くできていない　0% ①＋② 97%	A	【分析】 Googleクラスルームを用いて、ボランティアの案内を行うなど、自主的にボランティアに参加しやすくしたことで、改善につながった。 【今後の取組】 積極的にボランティア活動に参加できるように、呼びかけを継続していく。	生徒対象調査 （7，1月）
	・各種地域行事への参加	総務課	・過疎化が進み，独居老人が増えている。お年寄りの方々が参加する各種地域のイベントに積極的に協力することで，他者や地域貢献の精神を涵養する。	【満足度指標】（生徒） 「イベントの協力を通して，他者や地域への貢献の意義を理解できた」	「イベントの協力を通して，他者や地域への貢献の意義を理解できた」と答えた生徒の割合（①＋②）が A　９０％以上 B　８０％以上 C　７０％以上 D　７０％未満	①　できた　50% ②　だいたいできた　46% ③　余りできていない　2% ④　全くできていない　2% ①＋② 96%	A	【分析】 「総合的な探究の時間」の学びに加え、多くの地域行事に参加したことで、意識が高まったと思われる。中間報告に比べて、1年生の回答内容も改善された。 【今後の取組】 地域との連携を継続し、積極的に地域行事に参加できるような活動を続けていく。また、新入生には上級生の活動を伝え、積極的にイベントに参加できるようにしていく。	生徒対象調査 （7，1月）

学校関係者評価委員会の評価	様々なボランティア活動を実施している。地域に根ざした探究活動は、生徒に達成感や自己肯定感を育む意味でもとても有意義であるので継続してほしい。より多くの教員が関わり、生徒が地元活性化を考える力を育ててほしい。また、社会に出てからも自己表現力や探究心は大切であるから、個々の生徒が興味・関心を抱いていることを探究させ、他者にその魅力を発信できる力を育んでほしい。
評価結果を踏まえた今後の改善策	生徒が「探究につながる問い」が設定できるよう教師の指導力向上を図り、この学習で得たことを探究型学習につなげ、学力向上を目指す。探究型学習を通してこれからの社会で生き抜くために欠かせない資質・能力が身につくので、今後も地域との連携を継続し、積極的に地域行事に参加できるように生徒にこの取り組みの意義を伝えていく。

重点目標２　　一人一台端末を使った授業改善を進め、生徒の多様な進路実現を図る。

個別目標	具体的取組	主担当	現　　状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	判定	分析（成果と課題）及び今後の取組策	備考
・一人１台端末やタブレット等の教育ＩＣＴ環境を活用した生徒一人ひとりに応じた学力の向上や創造性の育成	・教員のＩＣＴ活用による授業力改善	教務課 GIGA校内推進リーダー 各教科	・個々の学力に応じた学習指導が必要である。 ・合理的配慮が必要な生徒への対応が必要である。	【成果指標】（教員） 「個別最適な学び」につながるよう、端末機を使って学習指導を実践した結果、学力が伸びた。	「個別最適な学び」につながるよう、端末機を使って学習指導を実践した結果、学力が伸びたと評価した教員の割合が、 Ａ　８０％以上 Ｂ　７０％以上 Ｃ　７０％未満 ①　伸びた　12% ②　概ね伸びた　65% ③　余り伸びていない　12% ④　全く伸びていない　11% ①＋② 77%	B	【分析】 端末使用における「学力を伸ばす」ことに重点をおいた個別最適な指導に困難がみられる。 【改善策】 学習支援ソフトを導入し、生徒ひとりひとりのニーズに応じた学習方法を検討する。また、教師同士での端末を活用した指導方法や評価方法について検討し「学力を伸ばす」ための指導方法を見直す。	教員対象調査 （7，1月）
	・生徒による「授業評価アンケート」の結果に基づき効果的なＩＣＴ活用による授業力の改善			【成果指標】（生徒） 端末機を使って学習した結果、学力が伸びた。	端末機を使って学習した結果、学力が伸びたと実感している生徒の割合が、 Ａ　８０％以上 Ｂ　７０％以上 Ｃ　７０％未満 ①　伸びた　57% ②　概ね伸びた　41% ③　余り伸びていない　2% ④　全く伸びていない　0% ①＋② 98%	A	【分析】 授業での端末使用頻度はかなり増加したが、各種外部模試結果を踏まえると、著しく「学力」は向上しなかった。 【今後の取組】 深い学びが実現できるよう学習支援ソフトを導入し、生徒の自己分析や個々の学力、進路希望に応じて学習指導を行う。	生徒対象調査 （7，1月）
・生徒の思考力・判断力・表現力の向上	・門高読書タイムや図書館講座の実施	図書課	・読書活動を通して生徒の思考力･表現力･判断力の下支えする力を養成する必要がある。	【成果指標】（生徒） 「年間３冊以上の本を読んだ（読書タイムに読んだ本も含む）」	「年間３冊以上の本を読んだ」と答えた生徒の割合（①）が Ａ　６０％以上 Ｂ　５０％以上 Ｃ　５０％未満 ①　３冊以上読んだ　61% ②　２冊読んだ　33% ③　１冊読んだ　5% ④　１冊も読まなかった　1% ①　61%	A	【分析】 年２回の読書タイムと読書感想文課題が読書冊数の増加に繋がった。一方読書タイム以外の期間は読書しない生徒が半数を占める。 【今後の取組】 読書に関する行事や課題をきっかけとする読書意欲喚起の場は引き続き設ける。図書だよりや掲示に加え、積極的に教員が読書の魅力を発信し、日常的な読書を促す。	生徒対象調査 （7，1月）
・「個別最適な学び」の充実による進路実現	・習熟度別授業 ・朝補習 ・放課後補習 ・個別指導	進路指導課	・多様な進路志望の生徒に応じた指導力の更なる充実が求められている。 ・大学進学を目指す生徒への個に応じた学習指導力の向上が求められている。	【成果指標】（教員） （１・２年生） 「全国模試の成績を伸ばすことができた」	「全国模試の成績を伸ばすことができた」生徒の割合が Ａ　７０％以上 Ｂ　６０％以上 Ｃ　５０％以上 Ｄ　５０％未満 ７月と１月ベネッセ総合学力テストの比較（全国偏差値）	B	【分析】 模試受験者計２７名（１１H１７名、２１H１０名）のうち、１８名（全体の６７％）の成績が向上した。 【今後の取組】 成績中・上位層の伸びを保障できるような指導体制を強化していく。	対外模試結果
				【満足度指標】（生徒） （３年生） 「卒業後の自分の進路について満足している」	「卒業後の自分の進路について満足している」と評価した生徒の割合（①+②）が Ａ　９０％以上 Ｂ　８０％以上 Ｃ　７０％以上 Ｄ　７０％未満 ①　満足している　64% ②　だいたい満足している　29% ③　余り満足していない　0% ④　全く満足していない　7% ①＋② 93%	A	【分析】 希望の進路を実現させた者が多い反面、高い目標を据えそれに挑戦して進路を切り開く気概が乏しいことが課題である。 【今後の取組】 目標に向かって段階的・継続的に行動していく力を育てる指導を行う。	生徒対象調査 (1月)
・進路意識の醸成と早期確立	・外部講師によるキャリア教育講演会 ・クリエイティブ人材育成事業 ・企業人インタビューＤＶＤの活用 ・インターンシップ ・進路ガイダンス ・進路学習 ・上級学校キャンパスツアー ・出張オープンキャンパス ・地元企業見学会	進路指導課 各学年	・働くことの意味や自分の適性を理解して，将来の進路設計を立てる力を養成している。	【成果指標】（生徒） 「自分の適性を十分に把握し，将来の進路について話すことができるようになった」	「自分の適性を十分に把握し，将来の進路について話すことができるようになった」と評価した生徒の割合（①+②）が Ａ　８０％以上 Ｂ　７０％以上 Ｃ　６０％以上 Ｄ　６０％未満 ①　できるようになった　28% ②　だいたいできるようになった　44% ③　ほとんどできない　26% ④　全くできない　2% ①＋② 72%	B	【分析】 複数の進路行事毎に、卒業後の自分をイメージし自分を客観視するという一貫性を持った振り返りにより、進路意識が向上した。 【今後の取組】 ３年間を通した進路ガイダンスを取り入れることで、生徒に見通しを持たせるとともに、教員自身が卒業後から逆算した進路指導方法を学ぶ機会を作る。	生徒対象調査 （7，1月）

学校関係者評価委員会の評価	門前高校の課題は学力向上にあり、年間を通じて様々な取組を実施したことにより生徒の意識は確実に変化してきている。明確な進路意識を持って学習に励み、ICTを効果的に活用して生涯にわたって自律的な学びができるよう指導してほしい。
評価結果を踏まえた今後の改善策	生徒の学力向上と学習習慣の定着はキャリア教育の充実によるものと考えている。ねらいを明確にした進路ガイダンスや個人面談、輪島市学習センターの活用を含めた進路ガイダンスを行うことで自主的に学習できるよう指導していきたい。また、輪島市学習センターの利用者が当初の見込みを大きく上回る14名にまで増加していることから、センターとの連携体制を充実させ、情報共有や効果的な指導等について協働していくことで、生徒の進路希望実現を果たしていきたい。

重点目標３　　若手・中堅教職員の教科指導力や生徒理解力、ＩＣＴ活用力、危機管理能力等の実践的な指導力向上に努める。

個別目標	具体的取組	主担当	現　　状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準				判定	分析（成果と課題）及び今後の取組策	備考
・教員の授業力及び資質・能力の向上	・教員による「学校評価アンケート」の結果に基づく授業改善	教務課	・生徒の目線で自己の教科・生徒指導を振り返り、ＩＣＴを活用した授業力を高める工夫や改善に取り組む必要がある。	【成果指標】（生徒） 「生徒の思考力・表現力を高めるために発表型の授業を実施している（実施した）」結果、理解が深まったと答えた生徒が増えた。	「ＩＣＴ機器により授業の理解度が深まった。」と答えた生徒の割合が Ａ　８５％以上 Ｂ　７５％以上 Ｃ　７５％未満	①	理解が深まった	57%	A	【分析】 「理解度が深まった」という高評価と実際の学力との相関に一致が見られないため、一概に成果があったとは言い難い。 【今後の取組】 学習支援ソフトを導入活用することで、生徒自身が個々の適性や自己分析する。また単元ごとの理解度を深化させることで、知識を活用する能力を育成する。	生徒対象調査 （7，1月）
						②	理解がやや深まった	41%			
						③	理解が余り深まらなかった	2%			
						④	理解が全く深まらなかった	0%			
					①＋② 98%						
・いじめの早期発見・早期対応	・いじめに関する校内研修 ・生徒観察，生徒との人間関係づくりによる早期発見・早期対応 ・いじめ調査の実施	生徒指導課	・「いじめは起こりえるもの」の意識を教員が常に持ち、未然防止に尽力する。	【成果指標】（教員） 「研修会等によって，いじめ問題について理解を深め，予防的生徒指導に生かしている」	「研修会等によって，いじめ問題について理解を深め，予防的生徒指導に生かしている」と答えた教員の割合（①＋②）が Ａ　９０％以上 Ｂ　８０％以上 Ｃ　７０％以上 Ｄ　７０％未満	①	生かしている	50%	A	【分析】 それぞれ肯定的な回答が５割となっている。前回の調査からは向上は見られているが、自信を持って『生かしている』というような指導を心掛けたい。 【今後の取組】 研修会や会議等で生徒が自己開示できるような活動や、自己肯定感が上がるような活動、帰属意識が向上するような活動を実際に行い、指導に生かしていく。	教員対象調査 （7，1月）
						②	概ね生かしている	50%			
						③	余り生かしていない	0%			
						④	全く生かしていない	0%			
					①＋② 100%						
・合理的な配慮が必要な生徒等、個々に応じた対応力の向上	・担任、教科担当者、ＳＣによる個人面談の実施と情報共有	教育相談	・個々の生徒について情報共有し、必要に応じて合理的配慮を行っている。	【成果指標】（教員） 合理的配慮をはじめ、個々の生徒を理解し、対応することができる。	「合理的配慮をはじめ、個々の生徒を理解し、対応することができる。」と答えた教員の割合が(①＋②)が Ａ　９０％以上 Ｂ　８０％以上 Ｃ　７０％以上 Ｄ　７０％未満	①	できる	68%	A	【分析】 情報共有の機会を適宜設けたことで、生徒の困りや、それに対する合理的配慮の方法を知ることができたと思われる。また、考査後、学期ごとなどの区切りに、各教科担当が授業での様子を学級担任に伝える仕組みも肯定的回答が多いことにつながったと思われる。 【今後の取組】 ケーススタディなど研修の機会を設け、全職員で指導力向上を目指す。	教員対象調査 （7，1月）
						②	概ねできる	32%			
						③	余りできない	0%			
						④	全くできない	0%			
					①＋② 100%						
・新型コロナ感染症予防対策・自然災害発生時の対応	・国(県)からの新型コロナウイルス感染症衛生管理ガイドラインを使った研修の実施 ・危機管理マニュアルの継続的な見直し	総務課 保健課	・部活動や寮、教室で新型コロナウイルス感染症対策について教職員が予防指導を実践できることが必要である。 ・地震等の自然災害発生時の対応の仕方を身につけており、実践できることが必要である。	【成果指標】（教員） 新型コロナウイルス感染症予防指導や自然災害等発生時の対応を実践することができる。	「新型コロナウイルス感染症予防指導や自然災害等発生時の対応を実践することができる。」と答えた教員の割合(①＋②)が Ａ　９０％以上 Ｂ　８０％以上 Ｃ　７０％以上 Ｄ　７０％未満	①	できる	37%	A	【分析】 緊急時には冷静な対応が要求されるため「概ねできる」ではなく、「できる」と答えられる割合をさらに高めていくことが課題である。 【今後の取組】 感染症予防に対しては、予防策をまとめ周知することを継続する。 自然災害に対しては、次年度もねらいを持った複数回の避難訓練の実施し、防災意識や対応力を高めていく。	教員対象調査 （7，1月）
						②	概ねできる	63%			
						③	余りできない	0%			
						④	全くできない	0%			
					①＋② 100%						
・スマートフォン等によるネットトラブルの未然防止	・スマートフォン等によるネットトラブル研修	生徒指導課	・指導を継続しながら生徒自身がその危険性を意識できるようにする。	【成果指標】（生徒） 校内でのスマートフォンや携帯電話によるインターネットトラブルに対する安全対策を実践している生徒の割合が高まっている。	スマートフォンや携帯電話によるインターネットトラブルに対する安全対策を「実践している」、「概ね実践している」と答えた生徒の割合が Ａ　９０％以上 Ｂ　８０％以上 Ｃ　７０％以上 Ｄ　７０％未満	①	実践している	54%	A	【分析】 肯定的な回答が多いが、「概ね実践している」という回答の割合が多い。なぜ安全対策が必要なのかといったインターネットトラブルの本質についてしっかりと理解させる必要がある。 【今後の取組】 具体的な安全対策を定期的に指導し、正しい知識を身につけさせて、実際に行動できるように指導していく。	生徒対象調査 （7，1月）
						②	概ね実践している	44%			
						③	余り実践していない	2%			
						④	全く実践していない	0%			
					①＋② 98%						
				【成果指標】（教員） 「私はスマートフォン等のネットトラブルの危険性を理解し，指導に生かしている」	「私はスマートフォン等のネットトラブルの危険性を理解し，指導に生かしている」と評価した教員の割合（①＋②）が Ａ　９０％以上 Ｂ　８０％以上 Ｃ　７０％以上 Ｄ　７０％未満	①	生かしている	42%	A	【分析】 生徒の回答同様に『概ね生かしている』という割合が多くなっている。具体的な指導を把握していない可能性がある。 【今後の取組】 使用時間が長く、SNSに費やす時間が多い実態を共有し、未然防止の観点で具体的な指導をしていく。	教員対象調査 （7，1月）
						②	概ね生かしている	53%			
						③	余り生かしていない	5%			
						④	全く生かしていない	0%			
					①＋② 95%						

学校関係者評価委員会の評価	教育ＩＣＴが推進され、スマートフォンやタブレットなどでのインターネット活用は日常化し、なくてはならないものになってきているが、一方で、昨今、社会問題化しているSNSの使用については大きな問題を孕んでいると思われる。問題に対する対策ばかりでなく、将来的な利活用のあり方などについて指導してほしい。
評価結果を踏まえた今後の改善策	全校生徒に対して定期的にスマホ利用に関するアンケートを実施し、実態を把握した上で各学年ごとに集会を開き、正しい使用方法や家庭でのルール作りなどトラブルを未然に防止するための指導を行う。SNSの問題の根底には道徳心や規範意識だけでなく、理知的な思考力とも関連があると考え、学習指導を充実させていく。

重点目標４　　目標を明確にして校務を遂行し、ＰＤＣＡサイクルで取組の検証・見直しを行い、業務改善を進める。

個別目標	具体的取組	主担当	現　　状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準				判定	分析（成果と課題）及び今後の取組策	備考
・目標を明確にし、取組をＰＤＣＡサイクルで検証しながら、効率的・戦略的に分掌業務を遂行する。	・目標を設定し、その目標を実現するための方策を立てる。また、その成果と課題を検証し、改善を図る。	各課	・目標を明確にし、ＰＤＣＡサイクルで検証しながら、分掌業務を行う必要がある。	【成果指標】（教員） ＰＤＣＡサイクルによって改善点を明確にしながら業務を遂行することで、目標を達成することができた。	「ＰＤＣＡサイクルによって改善点を明確にしながら業務を遂行することで、目標を達成することができた。」と答えた教員の割合（①＋②）が Ａ　８０％以上 Ｂ　７０％以上 Ｃ　６０％以上 Ｄ　６０％未満	①	できた	11%	Ｂ	【分析】 確認や引継ぎ、分析といったつながりを意識した業務の方法がまだまだ浸透しきれていないことが課題である。 【今後の取組】 各課で業務の最終見直しを行っている。出てきた課題を来年度以降につなげていけるように学校全体で取り組みを継続していく。また、外部の学習支援ソフトを導入・活用し業務改善を図る。	教員対象調査 （7，1月）
						②	概ねできた	63%			
						③	余りできていない	21%			
						④	全くできていない	5%			
					①＋② 74%						
・目標を明確にし、取組をＰＤＣＡサイクルで検証しながら、効率的・戦略的に教科指導を遂行する。		各教科	・目標を明確にし、ＰＤＣＡサイクルで検証しながら、生徒の目線で授業改善を行う必要がある。	【成果指標】（生徒） 教員がＰＤＣＡサイクルによる目標管理型の教科指導を行った結果、理解度が深まった。(7月と1月の授業評価)	「教員がＰＤＣＡサイクルによる目標管理型の教科指導を行った結果、理解度が深まった。」と答えた生徒の割合が Ａ　８０％以上 Ｂ　７０％以上 Ｃ　６０％以上 Ｄ　６０％未満	①	理解が深まった	57%	Ａ	【分析】 家庭学習時間が不十分なため、理解した内容の定着度が低い。 【今後の取組】 生徒の家庭学習時間が確保できるよう個々の能力に応じた課題の設定や、公営塾との連携、学習支援ソフトの活用など、生徒の目線で授業改善を行う。	生徒対象調査 （7，1月）
						②	理解が概ね深まった	43%			
						③	理解が余り深まらなかった	0%			
						④	理解が全く深まらなかった	0%			
					①＋② 100%						

学校関係者評価委員会の評価	教育活動の成果や効果を高めるために目標管理型は有効であり、ぜひ今後も推進してもらいたい。生徒の評価も高いが、学力向上の取組が家庭学習時間にも反映されるように取り組んでもらいたい。
評価結果を踏まえた今後の改善策	年度当初に「今年度の取組」を作成し、PDCAを二度行い、次年度に課題を引き継いだ。前例にとらわれず、社会や生徒の変化に適した教育活動となるよう、常に業務内容に対して点検を行う。また、そのことが働きがいや働き方改革とも結びつくと思われる。次年度は目標設定（ねらい）に対して適切な取組になるよう、協議を重ね業務改善を図っていきたい。

重点目標５　　ワークライフバランスやタイムマネジメントを意識しながらも、質の高い教育活動に取り組む。

個別目標	具体的取組	主担当	現　　状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準				判定	分析（成果と課題）及び今後の取組策	備考
・教員の働き方改革の推進	・部活動年間計画，月別活動計画作成及び見直し ・計画的、協働的な校務の推進 ・定時退庁日や最終退校時間を意識した校務の推進	全教員	・教員の多忙化解消に向けた取組の実践が喫緊の課題である。	【成果指標】（教員） 最終退校時間を意識した業務の推進に向けて、優先順位をつけて計画的かつ効率的に校務を行っている	「最終退校時間を意識した業務の推進に向けて、優先順位をつけて計画的かつ効率的に校務を行っている」と答えた教員の割合（①＋②）が Ａ　８５％以上 Ｂ　７５％以上 Ｃ　６５％以上 Ｄ　６５％未満	①	行っている	16%	Ｄ	【分析】 前期の結果を受け業務改善等を図ったが、調査結果から超過勤務の主な要因は後期も校務分掌業務であった。複数に跨がっていた校務分掌を解消し、メリハリ業務によって効率化を図る必要がある。 【改善策】 毎月２度の定時退校日を共通設定と個人設定に変更し、会議や学習指導、部活動は行わないことに加え、学習支援ツールの導入並びに公営塾の利用による学習指導の負担軽減を図る。	教員対象調査 （7，1月）
						②	概ね行っている	42%			
						③	余り行っていない	21%			
						④	全く行っていない	21%			
					①＋② 58%						
・各種行事・諸活動への自主的参加	・各種校内行事 ・学校企画の諸活動 ・学校祭等の生徒会活動	生徒会 総務課	・どの活動においても概ね意欲的に参加しているが，より自主的な活動になるよう指導し，良好な人間関係形成や自己有用感の向上につなげる。	【成果指標】（生徒） 「各種校内行事に自主的に参加し、自己の役割を果たした」	「各種校内行事に自主的に参加し，自己の役割を果たした」と実感できた生徒の割合（①＋②）が Ａ　８５％以上 Ｂ　７０％以上 Ｃ　６０％以上 Ｄ　６０％未満	①	果たせた	48%	Ａ	【分析】 行事が多いため、生徒に対してつけたい力を明確にした上で、精選する必要がある。 【今後の取組】 それぞれの行事の目的を生徒に周知して自主性を促す。	生徒対象調査 （7，1月）
						②	概ね果たせた	50%			
						③	余り果たせていない	2%			
						④	全く果たせていない	0%			
					①＋② 98%						
・部活動を通した人間力の育成	・競技力，表現力向上を目指した日々の取組	生徒会 部顧問	・限られた時間を有効に活用し，競技力・表現力の質の向上を目指すことで個々の人間力を高める。	【成果指標】（生徒） 「自主的に部活動に取り組むことで自分が成長した」	「自主的に部活動に取り組むことで，自分が成長した」と感じた生徒の割合（①＋②）が Ａ　８５％以上 Ｂ　７５％以上 Ｃ　６５％以上 Ｄ　６５％未満	①	できた	53%	Ａ	【分析】 少人数であるため、中高や近隣校との合同練習は実施されている。その一方で生徒の部活に取り組むことでやりがいや成長を実感できる場面が少ない。様々な形で成長が実感できる取り組みを進める必要がある。 【今後の取組】 大会等に出場する以外にも、部活動単位で、ボランティア活動や地域に貢献する活動をより多く設けるなどの取り組みを進める。	生徒対象調査 （7，1月）
						②	だいたいできた	43%			
						③	余りできていない	4%			
						④	全くできていない	0%			
					①＋② 96%						

学校関係者評価委員会の評価	働き方改革の成果が上がっていないように思われるので、改善を進めてほしい。特に、何が問題なのか、それに対してどのように取り組んでいくのか具体策を挙げて取り組んでほしい。働き方改革が教育活動にも大いに影響すると思われるので早急に取りかかってもらいたい。
評価結果を踏まえた今後の改善策	一人が複数の校務分掌を担当していた校務分掌組織を改編し、各自の分担のスリム化等を図ることによって業務の専門性を高めるようにする。そのことによってより良い教育活動を推進する。また、時間外勤務の縮減をねらいとして月２回の定時退校日を学校共通設定日と個人設定日に分けて設定する。学習指導においては学習支援ソフトを導入し、指導の効率化を図る。さらに、これらの取組を毎月総括し、業務改善シートを作成し、各月の目標設定等を見直し、業務改善を進める。